「伊能図」

日本国際地図学会・伊能忠敬研究会監修、清水靖夫ほか編著

200年前の実測日本地図

さっそく肥後の海岸線の地図を開く。ある、ある。北部には私の生まれ育った宮内村、荒尾村、増永村、一部村、蔵満村、長洲村……。道路や鉄道のかわりに広々とした平地が広がり、その対岸には、有明海を挟んで諫早湾が口をあけている。もちろん潮受け堤防もそこにはない。測量のための朱色の線が陸地を海面から吊り上げる糸のように正確に引かれ、そこに浮かび上がった砂浜や川、山の配色の美しさに目をうばわれる。そう、これは二百年前に、実測で作製されたあの伊能図なのだ。

ご存知のように、伊能忠敬は五十歳（数え年）で隠居するまでは、下総・佐原村の名家の商人であり、米の取引ではかなりの成功をおさめた才覚ある人物だった。しかもその儲けた金は、利根川の洪水や浅間山の噴火、天明の大飢饉の際、惜しげもなく地域救済のため投じていく。今で言えばNPO、いやNGOにも匹敵する活動を行った先駆けだ。そんな彼だからこそ幕府は推挙を受け入れ、御墨つき（認可）を与えた。忠敬もそれに応え、五十四歳という年齢にもかかわらず、十七年間で全国の沿岸測量を終える偉業を達成したのである。それは、列国から外交を迫られつつあった当時、急を要する事業でもあった。

もちろんここには、原寸複製版だけがおさめられているわけではない。便利なのは、現在使われている日本地図との対比索引図が用意されていることだ。そこと照らし合わせることによって、より迅速に、深く伊能図を味わうことができる。さらに幕府や忠敬が、どのような目的と方法をもって地図をつくっていったか、豊富な写真資料、図解、そして劇画にしたてられた物語によってわかりやすく説明されている。いわば、どの角度からもすべてが網羅されている決定版と言える。

これは出版社、ならびに監修者の地図への熱意なくしてつくれなかった一冊だ。今のようなハイテクがなかった時代、自分たちの足で歩き、素朴な機材だけで、これほどの地図をつくった歴史があることを、ぜひ多くの人に知ってほしい。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

武揚堂・13143円